

■菅沼一我 生年不詳～安政3年(1856)

駿府の竹細工の特徴である丸ひごを幾筋も刺したり、底や蓋に平ひごを編んで入れるなど、微妙な手作業による精巧な技法の伝搬者として岡崎藩士菅沼一我の名が伝わっている。

天保11年(1840)、諸国を行脚していた一我は、駿府の下級武士が作る内職の編笠を見、足を止めた。一我は、歌道、華道、茶道、機織などの諸芸に秀でていたようである。

一我は、弥勒にあった旅籠はふやに宿をとり、そこで当主清水市平の懇願により、その子猪兵衛に千筋細工を伝授したのが始まりという。

その後、山本安兵衛、佐藤吉衛門等他の門下生を取り教養した。菓子入器、虫籠等を製造し、道中上下する諸侯に販売をした。

一我の直弟子に高橋卯平があり、その弟子に飯田竹次郎がいる。飯田もまた、竹細工工業界の発展を図り、明治25年(1892)頃から数名の門下生を教養し、技術の伝授、指導、伝承に尽力している。

一我は、安政3年(1856)4月20日行年63歳で没し、葵区上石町の明泉寺に葬られた。

昭和9年(1934)発行、「駿河路を探ねて」(静岡県観光協会、森都喜彦編集)に菅沼一我のことが物語風に述べられているので、興味のある方は一読を。なお、この本は、静岡県立中央図書館に一部だけ資料保存されている。(館内閲覧のみ)

一我が逗留したといわれる「はふや」は、弥勒という立地から安倍河畔にあり、川止めなどで参勤交代の諸侯も通行していたことから脇本陣も務めていたという説もある。同じ弥勒に屋号も漢字で下駄の小売りとして「破風屋」という記述もあるが、同一かどうかは定かではない。一方では、「静岡市産業百年物語」観光・旅館の中、弥勒に「清水」という旅館名を見ることができ、

「明治初期静岡町割絵図集成」の弥勒に商人宿清水がある。

上石町明泉寺は、家康公の命を受け、二丁町を開いた伊部勘右衛門の墓で有名。国指定の伝統工芸士杉山猛氏(大正5年生まれ)は、昭和10年頃、明泉寺本堂裏の墓地で一我の墓に詣でたことがあるという。しかし、寺は昭和20年(1945)戦災で焼失し、その後墓地が整理されたり住職が代わるなどして、寺にその墓跡も伝承も残らず、竹細工職人で一我の墓を見た最後の一人になったようである。